

湧学館だより



最新の情報は
HP をチェック



<http://lib-kyogoku.jp>

☎ (0136) -42-2700

【図書利用時間 10:00~18:00】

日	月	火	水	木	金	土
5月			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

■ 図書休館日 ○ イベント開催日

5月の展示 毎日が記念日

365日毎日に記念日が存在しています。
それぞれの記念日に意味や由来があり、
面白い語呂合わせも! 今月は記念日に
関する本を集めました。



5/12 愛犬の日

5/29 幸福の日

図書講座「平家物語読書会」 中止のお知らせ

5月4日(土)・18日(土)に予定しておりました
図書講座「平家物語読書会」は都合により**中止**とな
りました。

皆さまには多大なご迷惑をおかけすることとなり大
変申し訳ございません。

中止となった図書講座「平家物語読書会」は
後日改めて開催する予定ですので
日程が決まり次第、再度お知らせいたします。

5/5

こどもの日は湧学館へ行こう!



13:30~お楽しみ映画上映会

「おしりたんていコズミックフロント」

(50分)

※入場受付は 13:15~

13:40 まで

湧学館 2階 視聴覚室

(予約不要) 先着 98名まで

5/5(日)は 10:00~

図書室臨時開館します。



こどもの読書週間今年のテーマは ひらいてワクワク めくってドキドキ

4/23(火)~5/12(日)

北海道立文学館のミニ巡回展示

「花・文学の中にさく四季の花」にちなんで

🌸 花に関する絵本や児童書の展示

🌸 花のしおりを作ろうコーナー

をご用意しています。



おとなも
こどもも

さらに期間中は
かしだしさっすうむせいげん
貸出冊数無制限!!



お子さま対象

おはなし会

5月18日(土) 11:00~

場所: 幼児室 (図書室内)

《申し込み不要》

お時間は 10分~20分程の予定です

大型絵本や紙芝居など

何度来ても楽しめます



「湧水塾」に入会しませんか!

町内にお住いの60歳以上の方、京極町「湧水塾」に入
会して、健康で生き生きと楽しく学びませんか。

当塾では、共に活動していく会員を募集しております。

当塾は、生活や文化に関する学習会、運動教室、軽スポ
ーツによる交流会、幼児や小学生との世代間交流会、見
聞を広めるための道内研修などを開催しています。

入会をお考えの方は、京極町教育委員会までお申込み
ください。

多くの皆さんの入会を心よりお待ちしております。



活動期間 4月~12月

活動場所 湧学館・公民館

対象 町内にお住いの60歳以上の方

※現在36名の方が参加されています。

年会費 2,000円

※道内研修にご参加される場合は、宿泊費などを
別途ご負担いただくこととなります。

申込方法 年会費をご持参の上、教育委員会までお越
し下さい。

今年も新たな知識を

楽しみながら身に着けよう!

《 新刊のご案内 》



【しあわせの輪】
群 ようこ／著



【め生える】
高瀬 隼子／著



【風に立つ】
柚月 裕子／著



【時の睡蓮を摘みに】
葉山 博子／著



【奔流】
広野 真嗣／著



【さあはじめよう! オーディオのある暮らし】
飯田 有抄／文



【老いの上機嫌】
樋口 恵子／著



【牛乳さえあれば】
小松 友子／著



【直紀とふしぎな庭】
山下 みゆき／作



【エグイ星ずかん】
渡部 潤一／監修



【石は元素の案内人】
田中 陵二／文・写真



【おかずだって はらがへるのです】
山崎 たかし／さく

その他の新刊一覧は [「湧学館ホームページ」](#) からご覧ください。

◆湧学館コラム◆ <「塞王の盾」と京極家> 「平家物語を読む会」村山功一



直木賞受賞作『塞王の盾』は、私たち京極町民にとって縁の深い作品でもあります。物語は、戦国末期に活躍した石垣造りの名工集団“穴太衆(あのをしゅう)”と当代随一の鉄砲造り集団“国友衆(くにともしゅう)”, その双方の当主の息詰まる対決を描いています。<絶対に崩れない石垣>と<破壊出来ないものはない鉄砲>の、まさに“矛と盾”の対決です。その緊迫した展開は読者を“今村ワールド”に引き込みます。

琵琶湖畔の要衝に位置する大津城は、豊臣家と徳川家の双方から狙われる存在です。城主京極高次は城の強化を決意し、石垣の修築工事を塞王と呼ばれる穴太匡介率いる穴太衆に依頼しますが、そこで描かれる京極家の姿は、私たちに大きな感動を与えてくれます。特に高次の奥方、初(浅井三姉妹、淀君の妹)の行動に匡介は強く心を打たれます。工事が始まり、炊き出しの場では下女たちに混じって働く初の姿がありました。匡介は「奥方のきまぐれ」と考えていましたが、着物が泥だらけになるのも構わない奥方の振る舞いを見た時、また改めて感じる京極家の雰囲気「京極家の人々は異常なのではないか」とつぶやきます。なぜ“異常”なのか。当時厳然としてあった“身分の垣根”が全くなかったからです。この時代の常識を遥かに超えた京極家のおおらかで明るく屈託のない雰囲気を異常と感じたのです。それは驚きと同時に、最大級の賛辞でもあったはずです。

以上は作家今村翔吾が描いた京極家の風景です。しかし私は現実に近いように思うのです。

父の代で没落しかけた京極家を“蛭大名”と揶揄(やゆ)されながらも立派に立て直し、名門京極家を現代に伝えた高次は、中興の祖として、また名君として讃えられるべき人物と思います。高次、初夫妻の人柄が作りだしたおおらかで明るい雰囲気は、家風として受け継がれ今に至っていると考えると、縁あって京極を町名とする私たちにとって、この作品は特別な思いを与えてくれるように思います。

ワクワク感と、ほのぼの感を同時に楽しめる一冊。ぜひ、ご一読を。